

真宗大谷派宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業学術研究助成
研究成果報告書

研究事業名：共同教化についての研究
所 属：同朋大学文学部仏教学科
氏 名： 市野 智行

本研究は「共同教化」をテーマとする。「共同教化」とは、「常に真宗の教えに生きる一人ひとりが、念仏者の誕生を願い、仏法聴聞・讃嘆談合の場を求め、熱意と覚悟をもって、教法宣布・寺院活性化のため、対話を重ね教化伝道・共同学習・相互扶助の場を創造実践していくこと」と定義することができる。一カ寺の寺院活性化を考える上でも、宗門が教化施策の重点課題の一つに「共同教化」を掲げることは首肯できる。しかし「共同教化」に対する理解や意識が宗門全体で共有、また醸成されているかと言えば、現状はそうはなっていない。そこでは以下の論点が整理されなければならないだろう。

- [1] 「共同教化」という言葉が宗門の歴史の中で、いつどのような背景をもって使用されたのか。(以下 [1])
- [2] 現場を担う末寺の住職・坊守・僧侶は「共同教化」について、どういった意識をもっているのか。(以下 [2])
- [3] 同朋会運動の歴史の中で「共同教化」に対する検証が、どのようになされているのか、またその歴史から私たちは何を学ぶことができるのか。(以下 [3])

[1] と [2] については、既に『同朋仏教』(第 56 号・57 号) で論じた。それらを引き継ぐ形で本研究助成の支援を得、[3] の課題に取り組んできた。そしてその成果として『同朋仏教』第 58 号に論文を投稿した。以下、その内容を示し研究報告としたい。

■収録媒体：『同朋仏教』第 58 号 31～72 頁 (査読付き)

■論文題名：「共同教化についての考察 (下) 第一次五カ年計画の検証を通して」

■論文要旨

【目次】

- 一 はじめに
- 二 第一次五カ年計画の課題
 - 二―一 三年目の総括
 - 二―二 『点検資料』と第二次五カ年計画の基本理念
 - [1] 運動への認識とその浸透
 - [2] 運動の隆盛とアフターケア
 - [3] 育成員
- 三 教団とは何か
 - 三―一 教団と宗門
 - 三―二 同朋教団とは
 - 三―三 丸山の指摘について
- 四 教区教化委員会設立の願い
- 五 人材の養成と大谷大学
- 六 おわりに

【要旨】

本論文では、同朋会運動が最も熱気を帯びていたと考えられる第一次五カ年計画期間（昭和37年～41年）に注目した。また、当時の企画室が研修部の資料を基に「真宗同朋会第一次五カ年計画点検資料」（以下『点検資料』）を作成しており、同時の状況を検証する上で必要な資料も残っている。加えて、当時日蓮宗では丸山照雄を中心にこの『点検資料』に基づいたレポートを発表しているし、『真宗』誌上もほぼ同朋会運動一色と言っていいような状況であった。それらの資料をもとに、まずは第一次五カ年計画期間に、どういった問題点が提出されているのかを洗い出した。論点は次の二つである。

【1】 運動の地方への波及

【2】 育成員の課題

【1】は特に運動3年目以降に見られる意見である。本論では、そこから更に①運動のアフターケア②教団論③教化委員会の設置、と三つの課題点について論究している。また【2】は同朋会運動開始直後から提出される問題である。これについては特に①人材養成②大谷大学への期待、という育成面に焦点を当てて考察を進めている。

詳細な内容は省略するが、寺院や僧侶が抱えている悩みや問題点は、当時も今も大きくは変わっていない。同朋会運動が直面した課題に、当時の人々はどう対峙し、具体的にどういった対策をしていたのか。その中で、うまく機能した例もあれば、目詰まりを起こした施策もある。それはそのまま現代への生きた教科書となると言える。本研究の最大の意義は、その歴史から現代の在り方を問い返すことにある。この研究成果を今後の寺院活性化、共同教化の具体的な実働に活かしていきたい。